

## コウノトリに魅せられた人達による地域づくり活動

農業部門 吾郷秀雄

### はじめに

生物多様性研究部会では昨年度、コウノトリの野生復帰が進んでいる豊岡市で、コウノトリによる地域活性化の取り組み調査を実施した。そこでコウノトリに魅せられた人たちの活動に感動し、出雲でもそのような活動ができないかを考えていた。

そうした中、平成 29 年 3 月に雲南市大東町春殖（はるえ）地区でコウノトリの営巣・飼育が新聞で報じられたため、今年度は「なぜ雲南市はコウノトリに選ばれたのか？」の調査を実施することになった。その中で筆者は、特に農業との関わりと地元の地域づくり活動に焦点を当てて調査を実施した。現地調査では、大東町内の地元の取り組みと雲南市立西小学校の活動について聞いた。

### 1. 大東町内の地元での活動

#### (1) 大東町幡屋地区の棚田調査

幡屋地区の現地調査では「赤川ほたる保存会」会長で、農業をされている松田勉氏に案内してもらった。聞き取り内容は次のとおり。

- ・ 「赤川ほたる保存会」は、昭和 30 年代になって河川がコンクリートなどで固められたためホタルが激減したのを憂慮して、昭和 58 年 4 月に結成された。松田会長は元役場職員で、以前から生き物に興味があった。以前はトンボがたくさん飛んでいたが、近年は農薬や化学肥料の影響から数が少なくなっていると感じていたため、減農薬や生物への影響が少ない除草剤を使用して稲作をしている。
- ・ 調査した棚田は、昔は小さな棚田がたくさんあったが、約 40 年前に機械化農業のために土地改良事業を実施して、乾田化を進めた水田である。
- ・ 乾田化は機械化農業には効果的であったが、生き物にとっては好ましくない環境であるため、コウノトリが話題になる約 10 年前から、生き物の数を増やすために「冬水田んぼ」の取り組みや棚田の法尻に、幅 50cm x 深さ 40cm 程度の土水路の「承水路（ヨケジ・ノキ）」を造成して生物の棲みかを提供して来た。なお、承水路は水田面積が減少するデメリットはあるものの、法尻周辺の地下水位が下がり、機械化農業には効果的な面もある。毎年、承水路の泥上げを実施し、また承水路周辺はあまり草を刈らないようにしている。
- ・ 当地区では承水路の造成を松田会長以外にも、5 人の農家が約 1ha の水田で実施しているが、全員ではない。承水路の造成は、関係者で事前に相談した

わけではなく、会長以外の農家の目的は機械化農業の課題を改善するためである。承水路にはたくさんのドジョウがいるし、また周辺にはマムシも多い。アメリカザリガニやウシガエルはいない。

- ・ イノシシが出る。池の下のかんぴょう畑ではイノシシがでて、カンピョウを転がして下の水田に落としたり遊んで困っている。シカ、猿は今のところ出ない。
- ・ コウノトリは H28 年の 11 月から H29 年の 8 月まで 4 羽飛来して来た。ここで越冬したため、冬場はタニシやドジョウを食べていたのではないかと思う。
- ・ 地区の農作業の共同化は、田植えの共同作業だけで、営農組合の設立までには至っていない。
- ・ 生き物に優しい活動は、行政に頼るのは問題があると考え、地元の熱意だけで実施している。
- ・ 今後の活動としては、餌場を拡大するために冬水田んぼや承水路を広げたいと考えている。また、コウノトリが来てから自然環境に興味を持つ人が増えたため、他の農家でもこれらの活動に協力してもらいたいと思っている。また、針葉樹の植林で広葉樹が少なくなったため、広葉樹を植えて豊かな森づくりをしたいと考えている。

## (2) 営巣場所の調査

- ・ 営巣場所は、JR 線木次線から約 50m しか離れていない 5 軒の家が比較的集まった場所で、巣がある電柱は家への進入路の道路際にある。その電柱の横には約 4m 幅の市道が通って車の通行があり、隣家には犬が飼われている。
- ・ 産卵が確認されてから、県立三瓶自然館(大田市三瓶町・サヒメル)の担当者が春殖地区のコミセンにモニター用ビデオを設置して常時監視活動をしていた。
- ・ 地元住民は巣作りをしたコウノトリ(オス:げんきくん、メス:後ほど誤射)を気遣って、こいのぼりの掲揚や草刈り機の使用を一時期控えたり、JR 木次線の枕木交換工事の延期や列車の汽笛を止めるよう JR 西日本に申し入れるなど、地域が協力して見守ってきた。
- ・ 繁殖に使われた巣は現在、コミセンに移設され、元の巣があった電柱には新たな巣が作れるように、鉄製の台が中国電力(株)により設置されている。

## (3) 大東町春殖地区の活動

- ・ コウノトリが営巣した春殖地区では、春殖地区振興協議会(石川幸夫会長)が中心となって共生を目指した取り組みが行われている。先進地であるコウ

ノトリ郷公園（豊岡市）への数回の視察や、「愛のコウノトリ募金」の実施、巣塔設置などの活動がある。

- ・ 「愛のコウノトリ募金」は、振興協議会でコウノトリが印刷された QUO カードを作り販売して集めた。1枚 500 円のカードを 1800 枚作り、1000 円で販売して差額を寄付してもらった。50 万円を市役所へ寄付して、市からの積極的な協力を得たいと考えられている。
- ・ 振興協議会は、NPO 法人コウノトリ湿地ネット(豊岡市)に営巣を促す人工巣塔 1 基の要請をして寄贈を受けた。建設地としては、げんきくんが近くの電柱にとまっていた西小学校の敷地内を選んだ。巣塔は高さ 12m のコンクリート柱の上に直径 1.6m の鉄製の円形台を設けたものである。
- ・ また春殖地区の有志の活動として、餌場を提供するためのビオトープ建設が行われた。圃場整備実施済みの 7 枚の水田耕作放棄地を借りて、トラクターにより耕起を行った後に 20cm 程度水を溜め、ドジョウが入れられた。現在、ドジョウ、タニシ、沢ガニがいるが、なぜかサギのメスだけがたくさん来ている。このまま 2~3 年間、これらのビオトープがどう変化するか見守る予定である。

#### (4) げんきくんのねぐら調査

- ・ げんきくんは産卵後からヒナが大きく成長するまで、昼間は卵やヒナを 2 時間交代で温めていた。
- ・ げんきくんが休息したり寝たりする電柱は、営巣から少し離れた幅 4m 程度の市道の脇にあり、この上に片足で立って寝る。電柱は糞で白くなっていた。

#### (5) 大東町内のその他の活動（新聞情報）

大東町内の住民 3 人が、オスやひな、誤射されて死んだメスの生前の姿を収めた写真集を自費製作して配布している。誤射後に悲しむ地元住民を見て「生前の姿を形にして残し、勇気づけたい」との想いで企画されたものである。

## 2. 雲南市立西小学校・和田邦子校長への聞き取り

### (1) 今までの活動

和田校長は地域の教材を活用しながら、教員に火をつけ、子供たちに火をつけることが自分の仕事だと考え、パワフルに活動をされている。学校でのコウノトリの取り組みに当たっては、春殖地区振興協議会や幡屋地区の人達に助けもあって今まで来られたと感謝し、次のように熱く語られた

- ・ 昨年 11 月頃、市内でコウノトリの飛来が目撃されてから、子供たちへの動機付けとして「地域にコウノトリが来ているよ。これを勉強することは面白

いよ」という話をした。

- 今年3月に営巢が分かった時には、絶対教材にしようと考え、4年生(30人)を対象にして「コウノトリを題材にした人と自然の共生について考える総合学習」を準備し、5月から取り組み始めた。その一環で、県立三瓶自然館で鳥類を研究する担当者を招いて話を聞いた。
- 5月に誤射が発生して、地域も子どもたちもガックリ来た。それではいけないと想い「げんきくとひなたちの応援プロジェクト」を立ち上げた。教員3人を勉強のためにコウノトリの郷公園へ派遣し、6年生(23人)が参加した「見守りボード」というプロジェクトを始めた。地域の航空写真を貼ったボードに、子どもたちや地域の人々のコウノトリ発見情報を受けて、発見月日を書いた小さな色紙を発見場所に貼り付けている。「どこに行っているのか」について、見守りボードを通して情報を発信し続けている。
- 7月の放鳥の際には子供たち全員が参加したが、放鳥時の箱を開ける役の子供たちには「箱を開けて放鳥することはすごい役目だよ」ということを明確にするため、任命書を作成して子供たちに渡した。
- 4年生の総合学習では、コウノトリの郷公園の資料を参考に調べ学習を実施。コウノトリの生態を学び、学校近くの水田を調べて餌となる生き物が多く生息する里山の自然の豊かさについて認識を深めた。



写真左：生き物調査をしている児童達。左側が承水路。小学校のHPから

写真右：コウノトリの実物大パネルを使った学習をしている児童達。小学校のHPから

「その後の新聞情報」

- 11月の学習発表会では、4年生は手作りの衣装を着てコウノトリやカエル、ドジョウやヘビ、地元のお年寄りなどに扮し、コウノトリの大きさや習性、好きな餌、産卵の時期、減農薬の水田が育む豊かな生態系などについて劇を通じて説明し、「より多くの来鳥を促すため豊かな自然を守っていこう」と来場者に呼び掛けた。

## (2) 今後の取り組み

今後の活動について、校長は次のように話された。

- 餌場の提供のため冬水田んぼや、耕作放棄地を耕起して水を溜めてビオトープにするように地域の農家に呼び掛けたい。
- 来年度には1年から6年まで系統立てて、コウノトリを題材とした教材にしようと準備中である。
- 11月末には小学校内に春殖地区振興協議会の協力で巣塔が建設される予定である。学校としては、巣塔は地域のシンボルであり、子供育てのシンボルであり、活動が継続するためのシンボルであると考えている。先生方は交代するが、巣塔があれば活動が持続すると想っている。
- 小学校の巣塔にコウノトリが定住するためには「餌場の提供」と「巣作り材料の提供」の2つが重要だと想っている。巣塔の近くに耕作放棄された棚田があるため、そこを借りて餌場となるビオトープを作りたい。また「1人1枝運動」として小枝を持参してもらって運動を始めたい。春殖地区の巣塔のそばの家では、裏山の木を大量に切って放置し、それをコウノトリが巣作りの材料にしていたので、巣塔の近くにたくさんの小枝を準備したい。学校からお願いすれば、地元も協力してくれると思う。

### 3. 考察

今回の調査についての考察と、計画づくりの提言をしたい。

#### (1) コウノトリの習性

- コウノトリは案外「人がいて賑やかな場所が好き」と感じられた。例えば、線路近くの家が比較的集中し、犬が飼われている近くの電柱に営巣したり、休息も車の往来がある道路脇の電柱を活用していた。
- また、サギとコウノトリは餌が同じであるため一緒にいることが多いが、人が近づくとサギは逃げるのに対してコウノトリは逃げない、と聞いた。人間がいると土地を耕し餌の採取が容易になるため、人間の営農活動に寄り添って生きようとしているのではないかと感じられた。これが、コウノトリが人間に好かれる一つの理由だと思われた。

#### (2) ビオトープについて

- 地域では耕作放棄地を耕した後に、深さ20cm程度の水を溜めたビオトープが建設されているが、将来、雑草が繁茂して餌場としての機能が確保できなくなるのが心配される。
- 昨年調査した豊岡市の田結地区では、耕作放棄地に水を溜めてビオトープが建設されているが、研究者も驚くような雑草がない望ましい状態であった。しかし、これは多くのシカが出没し草を食べているためであり、特別なケ-

スである。

- ・ 雑草が繁茂しないような水深を確保しようと思うと、40～50cm 程度は必要となる。このため、水深を深める対策あるいは数年に1度の雑草対策も考えておく必要がある。

### (3) コウノトリ定住化委員会について

- ・ 「コウノトリ定住化委員会（仮称）」を設ける案があり、良い考えだと思われる。しかし組織化に当たっては、行政に頼り過ぎると持続性の確保が難しくなる可能性があるため、行政の参加については注意が必要である。
- ・ 活動の持続性を確保するためには、興味がある人達が集まった「この指とまれ方式」による地元主導がいいと思われる。組織化の範囲は1つの振興協議会では狭すぎるし、雲南市全体では興味がある地域とない地域があるため大き過ぎる感じがする。なお、和田校長の意欲的な取り組みがあるため、西小学校を含めた取り組みが不可欠である。このことから、委員会の範囲は、地域づくりでも適切な範囲と言われる「西小学校の校区」（2つの振興協議会）が適当と思われる。和田校長の残りの在任期間間（約1年）での、地域と小学校が一緒になった取り組みが期待される。

### (4) ロジカルフレーム作りの提案

- ・ 「定住化委員会」を設立する際には、次のような論理的で参加型の計画立案（ロジカルフレーム作り）を提言したい。
- ・ 計画立案というと一般的に、事務局の関係者で計画の目的と活動内容が作られるが、オーナーシップ意識が弱くなり活動の持続性に問題がある場合が多い。
- ・ 提案する手法は計画立案に時間はかかるデメリットはあるが、国際援助で活用されている「**参加型で、一貫性があり、論理的な**」計画立案手法（ロジカルフレーム）である。まず現状における問題点を特定し、その原因を分析し、解決策を探って成果を明確にし、その実行計画をプロジェクトとして形成し、プロジェクトの事後評価にも活用できる方法である。
- ・ それは「分析作業」と「計画のフレームづくり」の2つから成り、参加型のWS（ワークショップ）手法により立案される。なお、これはPDCAサイクルの「P」ではなく、「C」の部分に当たる。
- ・ 分析作業では関係者分析と問題分析を行い、計画立案では10年程度の長期目標と5年程度の短期目標、期待される成果、そして活動計画を明らかにする。活動計画は5年間で、委員会の活動だけではなく、例えば行政やJAなどの他機関の活動も含めたマトリックスを作成する方法である。